

『地底の人々』を読む

—戦争は人間を悪魔に変える—

渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

Read “People of the underground”

—War turn man into a demon—

Sumiko WATANABE

戦争末期、秋田の鉾山で起きた「七ツ館事件」「花岡事件」を知らない人が多い。自ら危険な坑内に入り、生き残った当事者に何度も会い、徹底検証した上で書かれた松田解子の『地底の人々』（注1）を知る人も少ない。ノンフィクション作品の要素を持つ、リアリズムの手法で描いた『地底の人々』は松田解子の代表作に位置づけられる優れた作品だが、松田解子の名を知らない人も多いようだ（注2）。

近年、言わねばならぬことが多くなっている。「表現の不自由展・その後」が、近年顕著になりつつある右傾化風潮（注3）を支持する市民の脅迫めいた抗議を助長するかのようなトップ政治家や行政の長の口出しによって中止に追い込まれたこと、公立図書館に警察が令状無しで、誰が何時、どんな本を借りだしたかの「捜査関係事項照会」に館側が応じていたこと、日本本土を優先するために沖繩を「捨て石」にして悲惨極まりない沖繩戦で多数の犠牲者をだしたのに、加えて戦闘の足手まといの排除と軍の食料確保が目的だったの説がある政府による住民・児童の疎開が惹きさせた対馬丸悲劇への懺悔、反省もなく、県民の意思を踏みにじり、人類にとって貴重な自然を破壊し、今に至るも沖繩を「捨て石」状態にしていること、北方領土返還手段として「戦争」に言及して衆院で「糾弾決議」が可決されても議員を続けている丸山氏が性懲りもなく竹島は戦争で取り返すしかないとの発言に政府が無視の態度をとっていることなど枚挙に遑なしである。「こんな人」に、国は税金からいくら支給しているのだろうか。相対的貧困率はG7中日本は最悪で、民間勤労者の給与が二百万円以下は一千万人超（注4）という。ジェンダー問題解決には程遠

く男女格差は縮まらず貧困の常態化が進んでいる深刻な状況だが克服への道は見えないどころか逆である。二十年度防衛省概算要求が過去最大の五・三兆兆円で、兵器ローン残高も五兆五千億円と過去最大とか。「防衛大綱」に基づく、専守防衛を逸脱する「いずも」の空母化やF95Bやイーリス・アショアなどトランプ大統領の「バイ・アメリカン」に応えた言い値の高値での購入である。世界一の借金国は更なる借金を国民のワーキングプア層にも押しつけるのだ。日韓関係の不穏の原点は元徴用工問題だが、一九六五年の日韓請求権協定で解決済みと切り捨てられる問題ではない。元徴用工問題は本稿の主題と直結するが、拙著『植民地朝鮮における雑誌「国民文学」』で不十分だが検証したように過去の歴史を人道・人権問題として日本は真摯に対応すべきだろう。並べ立てれば我慢のならない問題が続出する。永住的日本在住の外国人は消費税はじめ税金を払っているのに選挙権もなく、朝鮮学校への補助金問題は公然たる差別ではないか。八月二五日の敗戦終戦記念日の首相談話には侵略国への反省も謝罪もなく、唯一の被爆国として被爆者への言及はあつたが一割以上の韓国・朝鮮人被爆者への言及はなく、関東大震災時の官が先鞭をつけた流言蜚語による朝鮮人虐殺事件に都知事は触れようとしなかった。「安部一強」と言われる権力者に対して物言わぬ空気が漂っている現況を、「議論がなく戦争末期と同じような政治の貧困」と言い切った古賀誠元自民党幹事長の発言（『東京新聞』19・8・12）は重い。自民党のトップだった人だが、「戦争は悲しい思いをする体験者をつばいづくる」故に「絶対駄目」、「七十四年間、日本は戦争に巻き込まれなかった。九条には、世界の多くの国に迷惑をかけたという償いの込められた謙虚な気持ちが含まれている。だから九条は世界遺産だ」は、正鵠を射た歴史観だろう。政権内に古賀氏のような理性的な人が三分の一ほどもいてくれたらと思わずため息がでてしまった。香港の自由を求める若者の息長い活動には感動し、拍手したいが、比べて日本の若者はどうだろうか。「悪魔に魂を売る」と批判される国立天文台予算への防衛費関与に若い研究者ほど抵抗がなく、三〇歳代以下ではむしろ賛成者が多いという。

軍事大国化、表現・行動の自由圧搾の身の毛もよだつ治安維持法下時代への回帰徴候が徐々に進んでいて、それに気付かず巻き込まれている現状に危機感を増幅させられているが、その進捗を阻止するために「負」の歴史をしつかりと次の世代に引き継いでいかねばならぬ。『地底の人々』に描かれた時代を端的に表徴した事象の証言に目をとめたい。一九三〇年生まれの子孫は西村京太郎は中学二年時（一四、五歳）に難関の陸軍幼年学校に入学したが、その入学式で、付き添ってきた父親たちに校長が、「今から、皆さんの息子さんは、皆さんの息子ではありません。国家の宝、天皇陛下の赤子として、ここ東京陸軍幼年学校で、育てます。われわれが、ご子息を立派な将校に育てあげることをお約束します」と言い、新人生に向かつては、「戦況は、苛酷である。しかし、わが帝國が敗れることはない。なぜなら、戦争において負けると意識した時が、敗北なのである。その点、われわれ日本人は、世界で、もっとも、自尊心に優れ、精神の高みにある民族である。従って、われわれが敗北することは、あり得ない。闘い続けて、勝利する。その確信があるからこそ、君たち四十九期生は、昨年の四十八期生以上の人数を採用した。それはすなわち、日本帝國が勝利し、アメリカのワシントンで、彼らに城下の誓いをさせるために、必要だからである。このことを胸に秘めて、勉強と訓練にはげんで頂きた

い」と訓示したという(『東京新聞』「この道」)。この日から幾ばくもせずに市民はB29の空襲の猛攻にさらされることになる。後述する哈爾濱の七三一部隊ではこの時期、ソ連軍進攻の情報に、施設の破壊、撤去をはじめ敗退に向けて大童になっていたのだ。大本営発表は特攻による武勲の華々しい報道ばかりで敗北が目睫の間に迫っていたことを国民は全く知らされていなかった。

『地底の人々』とは誰か

紙幅の都合上、作者松田解子(一九〇五―二〇〇四)についてはごく大雑把な紹介に留めたい。解子(本名ハナ)は秋田県荒川鉦山の「馬肉貝焼」と蔑称された鉦夫の長屋に生まれた。父は傭夫だったが解子一歳時に過労死。母は選鉦婦だったが女に長屋を貸さぬ掟により再婚。夫の鉦山病死で三婚。解子にとって三人目の父は犯されなかったこともあった恐ろしい暴君で、この父から逃げ出した東京で艱難辛苦と闘いながらプロレタリア文学隆盛期にあつて作家として地位を築いた人。母の酷烈な生涯を描いた『おりん口伝』が代表作とされているが、おりんは権力に立ち向かう強い女性像に創られていて事実とは異なる。私は『地底の人々』こそ最高作と位置づけたい。自らを「足家」と称したほど、足で書く行動家である。ノンフィクションものでは徹底的調査に基づいて書く作家である。

『地底の人々』は戦時下侵略の象徴的事件の一つと言える。「花岡事件」について描いた作品だが全五章中四章までが「七ツ館事件」と第一次中国人の強制連行者が中心に描かれている。事件そのものとしては「花岡事件」の方が格段に大きい、「七ツ館事件」がなければ起きなかった「花岡事件」の契機となった「七ツ館事件」詳述の手法は妥当だろう。花岡鉦山は一八八五年に発見され、同和鉦業の前身の藤田組が一九一五年に買収した、堂屋敷大鉦床始め幾つもの鉦床により急速に発展した鉦山で、政府はこの鉦山の価値から独立した花岡鉦業所として増産態勢強化を図り、それまで日本人徴用工、勤労奉仕隊、学徒・女子挺身隊のほか、植民地とした朝鮮から強制連行した朝鮮人で補ってきたが、「応召者」続出もあつて人手不足が深刻となり、四四年二月二八日、東条内閣の閣議決定「華人労務者内地移入二関スル件」と次官会議決定「華人労務者内地移入ノ促進二関スル件」によつて、四五年六月までに約四万人の中国人が強制連行された。政府の方針に従つた鹿島組は四四年五月八日、華北労工協会と中国人「移入」を契約し、四四年七月二八日、二九九人(内三名が船中死亡。上陸後、二名死亡)を連行。その後、四五年四月十八日に第二次として五八九名(途中死亡二名)、敗戦三月前の五月十一日に第三次九十八名、途中死亡を除く計九八一名が連行され、彼らは花岡川水路変更工事のほかに、至上命令の日産二千キロプラントの選鉦場付帯工事の短期完成にむけて鉦滓堆積場工事とそれに必要な暗渠工事その他が課せられた。

秋田県は鉦山県だが、ここの鉦山は産出する鉦種(金、銀、銅、亜鉛、硫化鉄、硫黄、鉛、重晶石、石膏その他)の多さでは世界でも稀と言われた鉦山だった。採掘する鉦内夫は、硫黄分が二〇から三〇^{パーセント}もある含銅硫化鉦もあつて、上半身裸の身体が熱気と湿気と骨の髄までしみこんだ

硫黄臭さのなかで全身汗にまみれ、水を飲み、塩をなめながら、鉱車レールさえどっぷり埋める凝灰泥や濃く深い硫化泥のなかを、カーバイト・カンテラの青い灯一つが頼りの漆黒の闇のなかで、いくら要求、嘆願しても「大東亜戦争完遂」の決まり文句で保安対策をとうろとしなかった藤田組によって、坑木があちこち崩れて「ノ」の字にのめり鉱体が見えだし、坑木の崩れるバリン、バリンという不気味な音に脅かされ、天井が下がって往きは立って歩けたところが帰りはかがまらなければならぬほどの命がけの坑内作業で、逃げ道用の坑道用意が規則だったがそんな余裕はないところには作られず、恐怖に怯える作業だったが危機感現実になると、乱掘により花岡川が崩落、陥没したのだった。この日、「七ツ館」に入っていたのは日本人十一人、朝鮮人十二人だった。植民地とされていた当時、朝鮮人は日本人にされていたので、会社は待遇に差別したが、鉱夫間では同じ仲間だった。

「七ツ館事件」

『地底の人々』第二章は、国民学校を出たばかりの数え十五のタツ子が、戦争下でなければ公休日の五月二十九日、慣れない暗闇の蒸し蒸しと暑い坑道を足下の泥土にのめりこんで転びそうになったり、天井の坑木に頭をぶつけたりしながら、七ツ館坑の切羽で待つ手掘鉱夫や削岩夫に一刻も早く渡さねばならぬダイナマイトや雷管を入れた箱を背負って、恐怖に怯えながら必死に走るように歩いてきたところから始まる。その時、「やまがうごいた」。一挙に坑木が折れ、身体中の関節がはずれるような震動、鼓膜が破れるほどの鳴動、あふり風でカンテラの灯が消えた。タツ子は震動で吹き飛ばされ気を失い、気がつくともまだ坑内だった。「だれかあーッ！ たすけてーッ！」タツ子の叫びは跳ね返ってくる筈だけだった。意識が遠のくなかで「ああ、おら祖母！ おら祖母なんぼ心配してるべ？ おらとこ死んだと思ってる、なんぼ泣いてるべ……」と思いつながら気を失う。切羽で待っていた鉱夫達はパニックに陥った。地表では落盤を知って大騒ぎになっていた。救助に奔走しながら会社に速やかな救助処置を求め、詰った。「あえーッ、おらタツ子、おらタツ子、……」狂ったように叫ぶのはタツ子の祖母のオスエばあさん。タツ子の父でオスエばあさんの跡取り息子を「姥沢坑の落盤に殺られ」、タツ子の母はお産で胎児と共に死に、タツ子の兄は戦場だ。「坑外だら一日一円十五銭、坑内だら一円九十五銭」。日当八〇銭の高さがタツ子を坑内入りさせたのだった。交代要員として坑外にいた鉱夫仲間が救助のために必死で掘り続ける。地底からカーンと鑿でレールをたたいて助けを求めている音がする。「生きてる！」。この作品で重要な役割を持つ定吉と甚一郎、橋本と朝鮮人の鄭と林を先頭に鑿をシャベルに変えて、続いて起こる落盤の危険も忘れて必死に掘る。三日目に「ひと」を発見。「お前、……姜ーッ」。朝鮮人一人を助け出した。会社は、「聖戦」を勝ち抜くために七ツ館鉱床を救う方法は閉塞するしかない、坑口を塞ぐ拳に出た。「生きてる」のになにをする、と仲間たちの憤怒、抗議を顧みず鉱口は塞がれた。その時刻に、鉱山長室では『軍』から来た経理佐官の接待で酒宴たけなわだった。

「七ツ館事件」を詳細に描く松田解子の筆は見事でまるでその場に居合わせたかのようだ。そうなのだ。事件のリアリティは「足家」解子の体験によるところが大きい。五〇年一月、『華僑新聞』や『アカハタ』で郷里で起きた「花岡事件」を知った解子は、八月三〇・三十一日に京橋公会堂で開催の全鉱連の第十四回臨時大会を傍聴に行き、代議員として出席していた花岡鉱山労組の、堂屋敷支柱員の田畑市蔵と掘削員の新田賢一郎を知った。解子ならではだがこの二人に一夜を裂いて貰って花岡事件について詳しく聞き、田畑の弟が「七ツ館事件」生き埋め日本人十一人の一人だったと知る。行かねばならぬ。解子は花岡鉱山の労組事務所に向かい、労務係に坑内見学を無理に頼みこみ、この鉱山で最大の堂屋敷坑へ保安係の案内で入坑し、鉱車でおりに坑道を歩き出して驚いたのは、あの陥没事件から六年、戦後五年経っているのに、坑道の凝灰泥のひどさ、天井の坑木のずり落ち加減のひどさ、坑内の暑さ、湿度の濃さなどが想像を遙かに越えていたことだった。『地底の人々』には臨場感溢れる筆致で「七ツ館事件」の顛末が描かれていて感動的だが、紙幅の都合上省筆せざるを得ないので、コンパクトに語っている『ドキュメント昭和五十年史』第六巻所収の「花岡鉱山の惨劇」(自選集未収録、75・2、汐文社)から部分引用しておきたい。

この入坑見学で、わたしはついに、「ここからさき、戦中連絡坑道でつながっていた七ツ館三番坑道」というその根きわの閉塞箇所まで行きつくことができた。

(略)そこはあたかも地獄のフタでもあるかのように頑丈なコンクリートの壁が立ちふさがっていたのだった。

わたしは数秒、壁すれすれに立ちどまって、見えない暗黒のあなたによこたわる二十二人の白骨をかいま見、その人びとの血みどろの手に鉱石のカケラや折れ坑木の切れはし、あるいはタガネや搔叉かきまをにぎってレールをたたき、助けをよぶ声をきく思いであった。

その場所こそは陥没前までの七ツ館勤務の労働者は、その連絡坑道をただひとつの道路として、通勤にも非常用にも兼用させられていた場所であったからだ。

本来は、どういう坑内にしろその坑内自体に、従業員の往復すべき通路や人命保全のための専用通路は、ぜったいもうけなければならない規定があったにもかかわらず、またその通路開設のことは、七ツ館坑の開坑とともに労働側から再三にわたって要求されていたにもかかわらず、花岡鉱業所は、——そして、当時鉱業所の上にあつて戦時増産の絶対命令を下していた現地軍関係者は無視し、あくまで堂屋敷坑の出入口と連絡坑道で充分だときめていたのである。

この生産現場における労働者の無権利状態と、現場末端にまでおよんだ圧制的な絶対支配こそが、七ツ館陥没事件をまねき、またそれが、中国人強制連行事件をもまねく一要因となっていたことが、じつさいに歩いてみた地獄図をつうじて明らかであった。

中国人俘虜の花岡入山

第二章は、戦争は人間を悪魔に変える、の見本だろう。朝鮮人徴用工の待遇は差別されていたが彼らはともかく植民地下で「陛下の赤子」だった。だが、中国人は交戦中の敵国民だ。その扱いは解子の描写があまりにもリアルなので心が凍る。四四年六月十日、中国人の第一次が到着した。憲兵・巡査・兵・鹿島組棒頭の居並ぶ花岡駅に臨時列車を迎えた花岡署長、鉾山の課長たちは、俘虜たちを引き取りに行った鹿島組の井勢監督が真っ先に引きずり出した隊長の耿順こうじゆんと通訳の于逸臣ういしんの姿に驚いたが、続いて有蓋貨車から投げ出された俘虜たちは「シャレコウベ列車だ」と口走ったほど骨と皮の人たちだった。起き上がれない老人を棒頭が棍棒で叩く。中国語の悲鳴が上がる。側に十六、七位の少年が走り寄る。老人の息子なのだ。倒れた俘虜を棍棒でこづき靴で蹴飛ばした棒頭の名は尾島。以後、作品に頻出する「悪魔」のトップは井勢と尾島である。井勢と尾島に代表される、これが人間か、これでも人間か、人間にこうまでできるのか、と絶句される暴虐の詳筆の続く中で清涼感を漂わせるのはとく子と朝鮮人徴用工林との真摯な愛の物語である。父を炭鉱で失ったとく子は母との二人暮らしだ。『おりん口伝』では、長屋は男にしか貸さない掟によっておりんは仕方なく三婚までしているのに、とく子が母と長屋に住めたのはなぜだろう。解子のうっかりミスか、男達が兵隊にとられて人不足になった穴埋めで働く女にも長屋を貸すようになっていたのだろうか。ここは疑問。七ツ館で死んだ人たちが鉾山長が「各自の不注意」と言ったことにとく子の怒りは収まらない。タツ子ではなく自分が犠牲になった可能性を思うと嗚咽が止まらない。その時、後ろ手に縛られ、数珠繫ぎにされながら銃剣で小突かれ小銃の台尻で地面に叩きつけられる瘦せさらばいた中国人俘虜たちの姿を偶然目にして恐怖に襲われる。隠れて見たいとく子は「そのむごたらしさ、みじめさ」をこれ以上見ていられなくなるが、彼らの行き場をつきとめたいとそつと後を追う。そして定吉や林たちに告げる。林が隠れて確かめに行き、あまりの痩せ細り方に怒りと憎悪を募らせる。

この時、クラブでは俘虜たちを受け取った面々が、引き取りに行った井勢たち慰勞の、サービスの女を侍らせての、ピフテキや土地の料理、県の銘酒「爛漫」などで盛り上がっていた。井勢の得意気な口舌が続く。現地の軍の徹底ぶりは見事で石門の收容所には俘虜が二、三千人もいたが、八路をかくまった百姓、抗日軍の連絡員や橋梁破壊や鉄道破壊の工作現場からの一斉捕縛、市場で買物中の住民、親子づれで食堂で食事中的親子など片っ端から手錠をかけて收容所に送り込み、逃亡防止から真っ裸にして同方向向けに二人繋ぎで地面にじかに座らせる、眠るなんて許されず、行き所が決まるまで何十日もそのまま。三千ボルトの電流が流れる鉄条網で囲ってあるがそれでも「逃げやがる」。毎日五人、十人、もつとが「くたばる」。死体は俘虜に掘らせた穴に放り込む。逃亡者は銃殺か飢え殺すか、実地演習として銃剣で突き殺す。それを真っ裸の彼らに見まいとするのを力尽くで見せる。食事は一日、コーリヤン粥一杯かマントー一個。井戸がないので三日間一度も水はやれなかった。連行途中の汽車や輪

送船では俘虜にやる水がなく、空き缶を腰紐で繋げて海水を飲みやがったので「死ぬほどぶつたたいやつた」が後で腹くだしが続出した。水に飢えて無理に出した小便を飲んだ奴もいたと面白げに話す井勢に、「そいつア、ほんとの自給自足だ」と大笑いする岩淵鉦山長に阿るように澄井庶務課長や花崎労務課長、塚本採鉦課長らが追従笑いをする。女に酌をさせた酒をあおりながら、「俘虜はあくまでも俘虜、敵性だッ、敵は人間じゃない、この觀念で」「軍以上」でいく決心だと豪語する河野所長に岩淵鉦山長が盃を手に赤い目で頷き、「いやあ愉快だ」。そこに警戒警報のサイレンが鳴る。戦況はそのような状況になっていたのだ。今から兵器製作の素材を掘って間に合うと本気に考えていたのだろうか。

三章は宮城遙拝と、「大東亜共栄圏」：「天皇陛下のおんため」：「名譽ある増産戦士」：「聖戦勝利のあかつきは」：「粉骨碎身」：「憎みてもあまりある敵、米、英、」：「一億一心」：等々のいつもの井勢の訓話で始まる地獄の日常が描かれるが、三昼夜めに、定吉たちの夜昼なしの必死の救助作業によって瀕死の姜が救助された経緯が姜の視点から挿入されることで、「七ツ館事件」が「花岡事件」の根であることを浮上させている。中国人達は二十日あまりで川の上流のダム工事から新しい水路の掘削に入っていた。削岩機などの機器は一切なく、スコップ、鍬などでの手作業だ。中国で使うバイスケと日本のモッコではモッコの方が効率が高い。だが、中国にはないモッコを彼らは使えない。説明されても怒鳴られても日本語が分からず理解できない。モッコに戸惑う「俘虜」に尾島が棍棒を振り下ろす。見ていた井勢に「だらけやがるんで」。ヤキがたりねえんだ。ヤキが」と井勢。隠れてみていたとく子は思わず顔を覆い、鄭と林の許に走り告げる。交流厳禁の掟破りを犯しての朝鮮人徴用工と中国人俘虜との友好場面だが、これは解子の思想によるフィクションの挿入だろうか。とく子が道に迷った振りをして尾島の目をそらし、その間に鄭と林が中国人俘虜に接触しようという企ては成功し、言葉は通じなくても「朝鮮」「朝鮮」と手を出す二人に意味がわかってがっしりと握り合っただった。とく子は尾島に道を聞く時間稼ぎをしていて危うく犯されそうになり慌てて逃げたのだが、ささやかな日・朝・中平和交流的一幕を書き込んでいる。

視点人物の一人横田定吉は、若いときにストライキに参加したことのある階級社会批判の目を持つ作中数少ない知的人物だが共産党員ではないのに「アカ」として特高や会社側から常に監視されていた。朝鮮人徴用工をかばったことで、朝鮮人飯場の親方兼警戒の仁村とやりあい、仁村の Катチャをふりかざしてかかってきた表情に「殺される」と恐怖した定吉が抵抗したことで監獄入りになる。監房内で「アカ」とは何か定吉は考える。浮かぶのは、鉦山労働者たちから「鉦夫の神様」と呼ばれていた加藤欣十と「農民の神様」と呼ばれていた細谷忠一の、定吉が心から尊敬している二人だった。連日の拷問に耐えながら彼らの不屈の闘いを思い、学ばねばと思う。加藤欣十は加藤勘十だが、解子の代表作『おりん口伝』でもおりんが心より尊敬する人物として言葉多く語られている。

虜使は凄まじい。飢えと重労働で弱り切って腰を落とした孫が棒頭瀬水に棍棒で殴り殺され、働き方が悪いと福多に棍棒で左腕を打ちのめされた張啓国が苦痛に呻く。みんなの信頼の厚さから全体の隊長に選ばれている耿順が、張の腕を医者に見せろ、骨折してこのままでは一生「か

たわ」になると福多に迫るが、福多はせせら笑う。耿順は更に詰め寄る。張だけではなく孫が殺された。今日だけで殴打による傷者が四人も出ているとの抗議に福多は、張を看護していた焦老人を追い出し、任に「張啓国は完全食事中止！ 焦保学は半減！」と命じる。人間の醜さの体現者といえる漢奸の任鳳伎の登場である。任は第一次の入山俘虜の中から選ばれた「軍需係」で、俘虜隊を賄う主食や副食の一切、作業に使うスコップ、シャベルなど道具一切の手配をする係で、人物を見込まれた異例の任命だった。彼は日本人の補導員と起居を共にし、食事も煙草も補導員と同格の待遇を受け、物資、食糧の出し入れは井勢と尾高の指導のもとで任の手を経て分配されていた。任は井勢・尾高の顔色を読み、命令及びび度によって俘虜用に配給される食糧を井勢・尾高、彼らを介して鉦山長・所長始め権力者たちが不自由なく暮らせるように配慮を怠らなかつた。俘虜たちの食事の悪化は加速し、水のような雑穀の粥一碗と皮付き乾し路一本、または茶飲み茶碗ほどに小さくなったマントー一個と塩味の汁一杯が一日の食料で、炎天下での酷使の労働に耐えられる訳もないことは明白なのに動けなくなれば容赦ない棍棒による死者、不具傷者が連日、何人も出るのだった。

昼間、尾高の棍棒で脛から血をふいた沢玉のために手桶の水を運んだ劉智集が引き据えられた。尾高・猪谷・井勢が第一小隊長の王盛林に「明日から『建設週間』というのに貴様の小隊はたるんでる。井勢所長代理の前で責任を果たせ」と棍棒を渡して沢と劉を「打て」と命じたのだ。盛林が「私に小隊長はつとまりません」と拒否すると、井勢が「自分の命が惜しくないんだな、任を呼べ」。そこに入ってきた耿順が全てを察して「全責任は私にある、私を殴って下さい」。呼ばれて来た任は井勢の命に従って老俘虜沢と「肺病」の劉を二十回ずつ、棍棒での殴打を命じられ、その後で王にも言われて任が棍棒を振り下ろしたとき、「任！ きさまは」と駆け寄った耿順が棍棒を奪った。耿順の髪は怒りで逆立っていた。尾高が耿順の髪をひつつかんで部屋の外へ突出した。任は汗みどろになって渾身の力で殴りつづけた。王盛林も殴られ、血が床（地面）を染めた。見ていた俘虜たちは怒りで歯ざしりしながら涙を流すしかない。

第四章。鉦夫にも職頭にも召集令状が来て、監督職員と作業員が欠員状態となったが、何人も殺されながら難工事の水路変更は進んでいた。定吉は釈放されたが自虐に苛まれている。特高の川島には何度も気を失ったほどの拷問を受けたが、最後となる尋問はこの戦争の是非と「陛下」を有り難く思うか、だった。天皇については考えたことはなかったが、有り難いフリをせねばと思ったとき、「天皇は警察が鉦夫を責め、会社が鉦夫を責めるときの、何より有利な」拷問道具」だったことに気づく。「不忠者」「非国民」「天皇陛下にたいしてもうしわけがない」で締め上げられて、定吉は獄舎から出たい一心から仕方なく、天皇陛下が詔勅をくださった戦争なので従うのが責務だから、今後増産に励む旨を手記に書いたのだった。強制されて書いた結びの「申しわけありませんでした」で釈放されるが、仲間たちは理解してくれたが「謝った」から出されたの思いに定吉は自虐し続ける。

ここでの主役は耿順だ。耿順は俘虜たちの食糧が横取りされていることを見抜いていた。彼は毅然たる態度で、河野所長に国際法の俘虜待遇に

従った規定の配給量を要求する。現実には規定量の二分の一かそれ以下で、餓死者が出ない日はない、今、趙有義という老人が死にかかっている、彼は空腹のあまり作業中に野草を食べたと行って補導員に殴られ、足腰が立たなくなったのに作業させられている、彼は非戦闘員で非道に捕縛された者だがほかにも餓死者が何人も居る、せめて冷たいマントーを暖かいスイトンに変えて欲しいとの嘆願に、入ってきた尾高が抵抗しない歌順を得意の柔道で思い切り何度も投げとばして失神させる。通訳の役柄から日本の現状を少しは知り得る立場にある于逸臣に歌順は密かに地形について尋ねているが、それは歌順が密かに逃亡か蜂起を目論んでいたことの伏線と読める。歌順は抗日軍が組織され、八路が活躍していた祖国で橋梁破壊に従事していたゲリラ隊員だったが目的を達した後には日本軍に捕縛されたのだった。食糧の不正を抗議に行ってしこたま殴られた痛む身体を引きずって戻った歌順は二九六人中一八〇人が殺されてやっと勝ち取った病室に向かう。趙老人が虫の息で横たわると息子の青児が寄り添っている。この親子は町の縁日に出かけてそのまま捕縛されたのだ。瀕死の肅忠の隣の劉沢玉は六人の補導員に殴られ気絶すると死に真似だと「赤熱したレールのきれはしをまたにさしこまれた」挙げ句、水責めにあつて。彼の上着は凍りついていた。「彼がどんな悪事をおかしたのか、毛布を」と毛布を要求しながら自分の上着を脱いで着せ替えた歌順をせせら笑う井勢たち。趙が息絶える。やっと手に入れた小片の紙に歌順は死者について全てを記録する。劉知集が、虐使、虐殺に耐えきれず、「これでもぼくらは忍ぶべきなのか。隊長の命令さえあれば」と涙ながらの訴えに、歌順は立ち上がる日はきつとくる、の思いを込めて知集の手を強く握りしめる。小説化だが事実でもあつただろう。

第五章は一瀉千里に結論に向かう。中国人俘虜の掘り立て小屋の宿舎は中山寮と呼ばれている。「中山」は「中国革命の父」「中華民国の国父」と尊敬された孫文の号だ。誰の名付けだろうか。戦局は既に敗戦目睫で、兵器製造に間に合はずなどないのに軍は狂気のように増産を叫び、第二次、第三次（作中の人数は誤り）の連行者が到着している。第一次の連行者は既に二百名以上が惨殺されている。第二、三次の者たちも次々に同じ目に合うだろう。総勢七百名以上の今こそ立ち上がるべき時、と考えた歌順は密かに新入山者と連絡を取る。新入山者は農民出、劳工出、知識層で、抗日軍参加の劳工出が最多で知識層がそれに次ぐことを知る。彼らは慣れていないためにいつそう労働と食事のあまりの酷さに苦しんでいた。先頃のこと、羅士英がいないと福多補導員が騒ぎ、探しに行つた福多に引き立てられて戻ってきた羅は血みどろだったが更に打つと歌順に棍棒が渡されたが断る。「人の吐いたヘドにつらをつけて土まですていたちくしょうを打てないのか」と怒鳴る福多に、そんなことまでするように「しむけたものこそ罰せらるべき」と歌順は言いさす。福多は第三船の中隊長張金亭に棍棒を渡すが彼は受け取らない。その夜、羅・張・歌は井勢以下六人から見るに堪えないリンチによって羅は意識を失い張と歌は食事半減とされた。見ていた仲間たちたちの憤怒の叫びを歌順は心に留め、敵を憎む意思力と行動力があり団結は可能と読む。

所長と呼ばれて訊かれた任は歌順と張金亭は抗日と報告。所長は任にスパイを命じ、任は応ずる。空襲警報が頻繁に発令される事態になつていく。東京下町全滅の大空襲を俘虜たちは知らない。鉾山長屋に第二、三次の俘虜入山の情報が伝えられたとき、オスエばあさんは「俘虜がきたら

はア、手エついてあやまつて、殺すつていつたら殺してもらうべはア」と言いながら、林や鄭、定吉や甚一郎たちが警察に引っ張られるのではないかと恐れていたのだったが、第三次入山から約ひと月半後の六月三十日、正確には七月一日午前零時半、近郷近在のありつただけのサイレンが盆地一帯に響き渡った。俘虜たちが蜂起に打って出たのだ。殴打による瀕死の重傷、それでなくともまともな体力のある者は一人も居ない筈のようが加わった総山狩りに太刀打ちできるはずがない。

蜂起は無謀といえるが、殺され方が中国人の「尊厳」を貶めることに我慢の緒が切れたといえるだろう。あと、ひと月半持ちこたえたら日本敗戦で終戦となり、彼らは戦勝国民になれたのにとつい、思ってしまうが、それは後付けの他者の理屈だ。情勢を全く知らされていない彼らにとつては止むに止まれぬ死を覚悟の行動だったのだ。全員捕まって数珠繋ぎにされ、炎天下で三日三晩食事はおろか一滴の水も与えられず共楽館前の広場で暴力を振るわれる彼らを見ていた人垣から「うー、つらましねえことするもんでねえかや、お前達……」「あれーまず、つまれたこと。鯉っコみてえにや、何人殺されたのだけや。あらかた生きてるのより、死んだ数の方、多いでねえかや」と女達が騒ぐなかで、ひとときわ高く、みんなに届く涙ながらの大声で「ええッ、なに鬼達だべナ、まず！ あのおぶったきアがることよ」で叫んだオスエばあさんは警察に連行された。歌順はじめ首謀者と目された人達は共楽館内で水責め、吊し責めその他暴虐の限りの拷問を受け、ここでの死者は百人に及び、ポツダム宣言受諾での敗戦後も中国人俘虜たちには日本の敗戦による終戦は告げられず強制労働は続けられて死者続出。年末までの死者累計四一七人に及んだ。九月十一日に歌諄（本名）他十一名に無期懲役一名、十年二人など有期敬の判決が下されている。呆れた裁判だ。

首謀者は自分一人だと主張し続けて血まみれになった歌順が署に連行されるのを見た広場の俘虜たちが一齐に叫び声を上げたとき、駆けつけた、その前に危険人物として警官に散々痛めつけられた血だらけの定吉、甚一郎や林、鄭は追ってきた警官に捕縛される。長編『地底の人々』の結語は、連行されながら定吉の仲間達への「待つてけるよ、それまでな、……待つて……」である。

おわりに——戦争は人間を悪魔に変える——

松田解子の国の関与した理不尽な暴虐事件への怒りは深い。その象徴とされるのが松川事件と花園事件である。一九四九年七月から八月にかけて起こった下山・三鷹・松川事件はアメリカによるとされているが正史としては未だに犯人が特定されていない奇妙で卑劣な事件だ。事件を知った解子はその日暮らしの貧にあって借金して何度も松川や入獄の彼らの許に通っている。広津和郎始め大勢の文学者・市民が無実獲得に一つになった数少ない事例だろう。私事を敢えて付け加えるならば、学生時代の私も「真実は壁を透して」の講演会開催、その件もあって広津や志賀直

哉と会った思い出を持つ。「松川を守る会」会員中、被告とされた人たちへの面会回数解子が最多であるばかりか、獄中被告からの通信発信数十五万通、受信数六万通が運動のひろがりを顕示するが、被告が文化人に宛てた手紙の中で最多は解子であるという。解子が花岡事件を知ったのは五〇年一月のことだった。解子は松川事件と花岡事件の両事件に八面六臂の活躍をしている。そのエネルギーは凄まじい。作品『地底の人々』は七ツ館事件と第一次中国人連行者が中心になっていて、第二・三次の連行者に対する暴虐描写は一次の人たちが受けた暴虐と変わらぬ酷さだったことからの省筆だろうか、完結が急がれていささか物足りない。この時期の新聞は大本営発表のウソ八百に埋められていて、神風が吹いて日本は勝つと国民は盲信させられていたようだ。

花岡では敗戦による終戦を俘虜たちは知らされず強制労働はつづけられていて、GHQの調査の始まりは十月六日だった。鹿島組関係者七人が逮捕されるが四八年、絞首刑三名を含む六名(一名は釈放)が有罪判決を受けるものの、その後減刑され、五六年には全員釈放されていて、腑に落ちない。朝鮮人の金一秀と李鐘応が姥沢に中国人の遺骨が散乱しているのを見つけたのは四九年の八月頃で四百余箱を信正寺に預けて供養して貰うが、遺骨は無数で発掘は追いつかない。解子が参加したのは五十年からで五三年七月に第一次遺骨送還に解子は参加している。遺骨送還は第九次(六四年)まで続くが殺された彼らの全ては故国に帰りきれではない。今でも雑草を抜くと根に白片がついてくるという。雑草が吸い上げた粉骨なのだ。五三年に「中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会」が結成され、解子を団長とした「遺骸新発見事件団」が六一年に結成され、六五年、「日中不再戦友好碑建立実行委員会」が発足し、翌年五月、除幕式を迎え、六七年六月三〇日に信正寺で中国人殉難烈士慰霊祭を、日中不再戦の誓いの集いを碑前で開催。以後、地元の高校教師始め有志の献身的活動によって例年の行事になって今に続いている。今年は七五周年になるが、事件を知って以後、十数年間私は毎年参加している。

ところで「七ツ館事件」を含む「花岡事件」は「負」の歴史の象徴的事件だが、なぜか広く知られていない。広津和夫の『松川裁判』はじめ松川事件は小説化もされて多数出版されている。後述する七三一部隊についても、生き証人は一人もいないにかかわらず、森村誠一の六冊を始めフィクション、ノンフィクション、史書その他で私の手元にあるだけでも二〇数冊に及ぶのに、「花岡事件」については管見では絵本の版画『花岡ものがたり』のほか小説仕立ての北上秋彦の『鬼哭青山遙かなり』(NHK出版、〇五年)と水上勉『釈迦内柩唄』(新日本出版、〇七年)のほかには、本格的に扱ったほとんど唯一といえる松田解子の『地底の人々』のみである(注5)。なぜだろう。『釈迦内柩唄』の帯には「人間である以上は、何とも何とも語りつがねばならないものがある」とある。まさに「地底の人々」は花岡事件を語りつぐ重要な一冊といえる。

「何とも何とも語りつがねばならぬもの」には花岡事件もだが、「沖繩戦」他数多く、その重要なひとつに七三一部隊がある。七三一部隊についてはある程度の知識はあったが、実感として知ったのは二〇一六年に国際善隣協会による「戦後70周年日中友好訪中団」に参加して中国東北部(旧満州)を訪れた際に寄った哈爾濱平房の七三一部隊跡に驚愕したことによる。敗戦を察知して爆破したが仕切れずに残っている残がいもあり、そ

の広大さに言葉を失ったが、「罪証陳列館」が改装中で入館出来なかったので、翌年、個人旅行で行き、安上がりで効果抜群の細菌戦に向けて三千人以上の人々を生体解剖した、大規模な悪魔跳梁の実態に接して凍り付いた。関連書二十冊ほどを読み、戦争は人間を容易に悪魔に変えてしまうものだとの思いを深くし、専門的に研究・検証し続けているABC企画に入会して以後、毎年でかけている。その間にアウシュビッツ・ビルケナウにも行きながら「戦争」について考え続けている。七三一部隊は平房が本拠だが、平房に本拠地を創る前に石井四郎部隊は「背陰河」に拠点を構えていて、ここでも生体解剖はなされていたという。生体解剖された「マルタ」と呼ばれた人間ではなく丸太ん棒扱いされた犠牲者は普通三千人と言われているが、この数は平房での概数で背陰河や至る所に設営された支部隊（ここでも生体解剖がなされていたようだ）での数は入っていない。二〇一八年は「哈爾濱・東寧・綏芬河・牡丹江（海林）・林口」に行ったが、一九九年は「浙江省・義烏、湖南省・常德を訪ねる旅」だった。どちらも支部隊である。大量に培養された細菌（主にペスト菌）の効果確認のために散布した人体実験による多数の民間被害者の見るも無惨な写真の展示には言葉を失ったが、衛県から義烏へと撒かれたペスト蚤によるペスト発生の悲惨さ、美しい都市の常德は商業地なので、感染に気付かず移動した商人によって四川、貴州、湖北、さらに遠くまでの伝播は一次感染から二次、三次へと広がり、一万人以上が死んだという。「湖南文理学院」大学の「細菌戦罪研究」が細菌研究の拠点になっていて、ここで親・兄弟・親戚・知人・友人たちを犠牲にされた遺族から話を聞く機会を得たが、憤怒に溢れた号泣の証言には身の置き所もなく、罪の意識に震えた。生体解剖という悪魔的所業を平然と行った張本人たちはアメリカにデータを渡すことで戦犯を免れたどころか、持ち帰ったデータによって学位をとり、大学教授として悠々の後半人生を過ごしていること、理不尽に怒りを抑えきれない。アメリカはこのデータを活かして朝鮮戦争やベトナム戦争で使ったとも言われている。罪は重い。七三一部隊への怒りは表現に窮するがさらなる驚愕は常德から長沙に向かう途中の南県での第二の南京事件のあった「南県廠屠殺記念館」だった。第二の南京事件があったことを知らなかったことに忸怩たる思いに責められながら回った展示写真には絶句の連続だった。複数の全裸にされた女性をいたぶり、全裸にされた女性の内蔵を抉り出し、剣先に乳児を突き刺して振り回すのを笑っている日本兵。河は夥しい屍体で埋まり、町は放火された家々の焼け跡のみ、等々、まさに「三光作戦」を示すリアルなのだ。

人間はこうも残酷になれるものなのか。アウシュビッツの八倍以上の規模のビルケナウでも、人間の尊厳が踏みにじられた恐怖の現場を見て来たが、残酷極まりない沖繩戦における集団自決にもいえるが、ほんの一端のみ記した「花岡事件」、そして七三一部隊。戦争は人間を容易に悪魔に変えてしまうものなのだ。戦争の出来る国へと舵取りする安倍政権にずるずると引かれている知性劣化の昨今、「何とも何とも語りつがねばならないもの」は多い。

(注1)『松田解子自選集』第六卷(〇四年五月)。「人民文学」一九五一年九月・一〇月合併号、五二年七月まで連続連載に書き下ろしを加えて五

三年三月、世界文化社から刊行。七二年六月、民衆社より改訂版刊行。『自選集』はこの改訂版を底本とする。

(注2) 松田解子については拙著『気骨の作家 松田解子 百年の軌跡』(秋田魁新報社、二〇一四・十一月)参照。

(注3) 日本ではメディアも喫緊の重要問題視していないが、外国メディアは早くから危険視している。『危ない勢力』の「日本会議」が着実に会員を増やしているという。安倍氏を筆頭に、安倍政権の閣僚十九人中十五人、自民党国会議員の半数が所属していて、一五年現在で三万八千人(トップの一人に櫻井よし子)の会員を擁し、なお増加し続けているという。「日本の政治をつくりかえよう」としている極右ロビ―団体」で、「超国家主義的で歴史修正主義的」目標、例えば「天皇の権威の復権、女性の家庭への従属、そして再軍備」など、歴史回帰をめぐす勢力で、「戦後日本の民主主義体制を死滅に追い込みかねない悪政ウィルスのようなもの」(青木理『日本会議の正体』平凡社新書、二〇一六・七)と言われる。安部昭恵氏が森友学園で園児に「教育勅語」を朗唱させているのに感動した(そして名誉園長か)という事実を忘れてはならない。国民、メディアは「日本会議」の動向を厳しく監視しなければ、いつか来た道に入って抜け出せなくなるだろう。

(注4) この数字に対して、政治資金での飲食に閣僚三人が一〇〇〇円超の支出、わけても問題発言の多い麻生氏の二〇一八年の飲食を伴う高級店での会合費は二四六二万二六一八円(東京新聞)と突出している。税金の使われ方を国民は監視しなければならぬだろう。

(注5) 後に「守る会」による広報活動、野添憲治『聞き書き花岡事件』(一九九〇)、旻子、山邊悠喜子訳『尊嚴―半世紀を歩いた「花岡事件」』(二〇〇五)他が刊行されている。